

# 文字からみた マレーシアの民族、社会

坪井祐司 つばい ゆうじ / AA 研究機関研究員

多民族社会のマレーシアでは、街を歩くとラテン文字、漢字、インドの文字など、さまざまな文字が目に入る。マレー語はラテン文字で表記されるが、ときにアラビア文字の表記をみかけることがある。同じ言語が二種類の文字で表記されるのはなぜだろうか？



マレーシア独立50周年を祝う垂れ幕。3つの言語、4つの文字で書かれているが、ジャウィが中心に配置されている。



クアラルンプール市内の看板。インド人(上)、華人(下)の店でもジャウィを含む複数の文字表記がある。

ラテン文字	アラビア文字
A	ا
E (弱)	表記せず
E (強)	ي
I	ي
U	و
O	و

マレー語の母音表記におけるラテン文字とアラビア文字の対応関係。



## ジャウィとルミ： マレー語の二つの文字

マレーシアは、マレー人(先住民と合わせて人口の約67%)、華人(約25%)、インド人(約7%)などからなる多民族社会である。各民族は独自の文化を持ち、言語・文字・宗教なども複数存在する。本稿では文字に注目し、ジャウィと呼ばれるアラビア文字をもとにしたマレー語表記について紹介したい。

ジャウィとはジャワ島を語源としており、中東における東南アジア出身のムスリムを指す語であったが、彼らの言語であるマレー語も指すようになった。マレーシアにおいて、一般にジャウィといえばアラビア文字で表記されたマレー語を指し、ジャウィ文字といえばアラビア文字を指す(一部にマレー語表記用に独自に作られた文字も含む)。ジャウィに対比されるのは、「ルミ(=ローマ字)」と呼ばれるラテン文字表記のマレー語である。

現在、マレー語といえばほぼすべてがルミであるため、ジャウィはマレー人自身からも過去のものとみられてきた。しかし、ジャウィはしぶとく生き残っており、近年マレー人

のジャウィへの関心が復活するという現象もみられる。これは、どのような意味を持つのだろうか。

## ジャウィの歴史

まずジャウィの歴史を振り返ろう。マレー語は、マラッカ海峡の兩岸(マレー半島、スマトラ島東海岸)を本拠としたマレー人の言語である。それとともに、マラッカ海峡を往来する商人たちの共通語としてマレー人以外にも利用され、マレー・インドネシアの海域世界に広く普及した。

マレー語は独自の文字を持たず、外来の文字により表記されてきた。古くはインド系の文字が使われたが、イスラム教とともにアラビア文字が到来した。マレー・インドネシア地域のイスラム化とともに各地で現地語をアラビア文字で表記する書き言葉が生まれたが、そのうち最も広く流通したのがマレー語であり、多くの宮廷文学や宗教書がジャウィで書かれた。

その後、ヨーロッパ勢力が海域に進出し、19世紀になると植民地統治が本格化する。マラッカ海峡はイギリスとオランダにより分割され、マレー半島はイギリス、スマトラ島はオランダの支配を受けた。前者が現在のマレーシア、後者がインドネシ



マレーシア建国宣言(1963年、英語、マレー語)。マレー語版はジャウィである(マレーシア国立博物館)。

現存する最古のジャウィとされるトレンガヌ碑文(1303年)の複製(トレンガヌ州立博物館)。



最近出版された子供向けのジャウィの教本、絵本。



クラシカ・メディア主催のジャウィのセミナー。



クラシカ・メディアと京都大学の共催で行われた『カラム』に関する国際ワークショップ。

アとなる。両国はそれぞれマレー語のラテン文字表記を公定し、それを行政や学校教育に導入した。これがマレーシア語・インドネシア語のもととなった。両者は違いもそれなりにあるがお互いに通じ合う関係で、いずれもラテン文字で表記される。

ただし、ジャウィ（アラビア文字）からルミ（ラテン文字）への転換は一直線に進んだわけではない。人口規模、民族的多様性が大きく、ジャウィの共有度が相対的に低かったオランダ統治下では比較的早くルミが普及したが、ムスリム人口におけるマレー人の比率が高かったイギリス統治下ではジャウィの伝統が残った。マレー半島では、植民地期の20世紀前半が実は最もジャウィが流通していた時代である。行政の場でのルミの普及が進む一方で、民間ではジャウィによる出版活動が発展し、多くの新聞・雑誌が発行されたからだ。前近代のジャウィの流通範囲が王権・宗教関係者に限られてい

たのに対して、植民地期には識字率の向上とマスメディアの普及によりジャウィの大衆化が進んだ。

### 現代マレーシアにおけるジャウィ

第二次大戦後にイギリスから独立したマラヤ連邦（のちのマレーシア）政府は、国語の表記文字としてラテン文字を採用した。多民族社会において、各民族が共有できるのはラテン文字だったためである。この結果、民間の出版活動においてもジャウィからルミへの転換が急速に進んだ。ジャウィは過去の伝統とみなされ、わずかに数十年前の質量ともに豊かな記録は現在から切り離されてしまった。

現在のマレーシアにおけるジャウィのとらえられ方には世代差がみられる。植民地期から独立当初に幼少期を過ごした老人たちにとって、ジャウィは郷愁を誘う存在である。一方で、現役世代のマレー人にとってジャウィはなじみがない。アラビア文字は母音を表記しないため、ジャウィでは母音の表記は子音の文字により代用される。しかし、6種類あるマレー語の母音と一対一には対応しないため、一つの綴りに複数の読み方が生じる可能性がある（20頁左下の表）。さらに、古いジャウィでは母音が表記されない場合も多く、文法や語彙も現在とは多少異なるため、同じマレー語でもルミで育った世代には読みにくいのだ。

しかし現在、ジャウィが見直される動きが出てきている。マレー人がジャウィを自らの文化のシンボルとみなすようになったのである。その背景には、1970年代以降の世界的なイスラム復興の動きがある。コーランの文字であるアラビア文字でマ

レー人の言語を表記するジャウィは、彼らのアイデンティティを強める要素の一つとなった。

ジャウィの復活に一役買っているのがマレー人主導のマレーシア政府である。1980年代には、政府系機関の主導でジャウィの正書法の見直しが行われた。そこではルミの綴りとの整合性が重視され、結果として母音の表記も増えて現代人にも読みやすい綴りとなった。2000年代にはいり、小学校でもジャウィが教えられるようになった。マレーシアでは、ムスリム向けに「イスラム教育」という科目がある（ムスリム以外は「道徳」となる）。そのカリキュラムの一部にジャウィが組み込まれ、教科書や副読本も作られた。ジャウィに慣れ親しんだ若者層が登場することで、ジャウィをめぐる世代差にはまた新しい要素が加わるだろう。

### 『遺産から展望へ』

民間にもジャウィの復興の動きが出てきている。筆者は、現在マレーシアでジャウィの資料のデジタル化や復刻事業を行っている出版社に協力している。きっかけは、1950～60年代に発行されていた『カラム』というジャウィの雑誌に関する京都大学地域研究統合情報センターの共同研究であった。同誌は、東南アジアから中東へと広がるムスリムの国境を越えたネットワークがうかがえる貴重な資料であるが、これまで十分に利用されてこなかった。共同研究は、デジタル化を通じた現地社会との資料の共有や研究の社会還元を目指すもので、マレーシアにおける提携者を求める過程で出版社クラシカ・メディアのムハンマド・シュクリ氏と知己を得た（『カラム』とそ

の共同研究については、<http://majalahqalam.kyoto.jp/>を参照）。

シュクリ氏は、「遺産（マレー語でWarisan）から展望（Wawasan）へ」をキーワードとして、ジャウィにマレー人の文化としての現代的な意義を見出している。彼は、京都大学の共同研究との提携を出発点として、デジタル化された『カラム』の復刻版やそれに関する研究の出版、ジャウィの研究組織の立ち上げなど、幅広い活動を行っており、マレーシアにおいて独自の活動の基盤を作りつつある。

筆者はクラシカ・メディアが主催するジャウィのセミナーに参加した経験がある。参加者は、大学生から一般企業に勤める社会人までさまざまだが、専門的な研究者としてではなく、自文化や歴史への関心から教養としてジャウィを学ぼうとする人々であった。彼らは、ジャウィに対して最初は戸惑うこともあったが、もともとマレー語は母語であるため、一通り読み方の手ほどきを受けるとすらすらと読めるようになっていた。

現在のマレーシアにおいて、ジャウィは言語・文字として必要不可欠な存在とは言い難い。しかし、ジャウィは実用性以上にメッセージ性を持っている。言語・文字は他者との関係を取り持つ役割だけでなく、民族固有の文化として他者からの差別化を図る役割を持つこともある。みんなが使うラテン文字でなく、ムスリムのみが使うアラビア文字のジャウィは、マレー人の絆を強める存在として見直された。多民族社会のマレーシアにおいて、文字には人々の価値観や関係性が埋め込まれており、その役割も常に変化しているのだ。



ジャウィ雑誌『カラム』の創刊号（1950年）の表紙。